
まがいものの朱い月

子義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まがいものの朱い月

【Nコード】

N2583S

【作者名】

子義

【あらすじ】

かつて表と裏と共に繁栄していた人間は滅び、それに伴い死徒も滅びた。

動植物もほとんどが死に絶え、星は既に死に今や鋼の大地。

しかしその地下で一体のホムンクルスが覚醒の時を待っていた。

魔術師達の悪あがきの結果、一つの究極にたどり着いた人造生命。

ホムンクルスは母と呼ぶ三つの魂の言葉に従い過去を目指す。

ハッピーエンドを掴み取るため。己の幸せを見つけるために。

深層世界（前書き）

型月作品を書いてみたかった。

難しい世界観だけど、どうにか頑張って完結を目指します。

型月作品の知識がある程度ないと読みにくいかもしれません。

では、どうかお付き合いください。

深層世界

「はい、この話はこれでお終い。どうだった？」

そう言い銀髪の少女は分厚い本を閉じる。

小柄な体躯に雪を連想させる美しい銀髪にどこか魔性を感じさせる紅い瞳。

雪の妖精のような少女は持っていた本を後ろに山積みされた本の上に置く。おびただしい数の本がそこにはあった。

本の群れ、本の山、本の海。彼女らが腰掛けている椅子とテーブル以外は本によって埋め尽くされていた。

暗い古城の決して狭くは無い一室を埋め尽くす本。一体どれほどの数なのか想像もつかない。

「ふむ、おぼろげな記憶の欠片が私にもあります。その世界の私が逝った後はそのような事が起こっていたのですか……」

感想を述べたのは金髪の少女。

雪の少女とは対照的な翠色の瞳に青いドレスを着ている。仕草一つ一つからどこか気品を感じさせるお姫様のような少女。

「そうよ、最後は私が聖杯を閉じてお終い。シロウはその後桜と幸せに暮らしました、と。一応はハッピーエンドって文章からは分かるわね」

分厚い本の一つ一つはとある物語が書かれている。いや、厳密に言うとそれは物語ではなく実際に起こった出来事を文章で記録されているのだ。

「どれもこれも興味深いわね。中々波乱万丈な一生を送ったみたいねあなた達」

金髪の女性が一冊の本を眺めながら言う。

容姿は先ほどの二人が少女であるのに対し、成人した大人の女性に見える。

金糸のような髪に鮮血よりもなお朱い瞳。そして白い服を着た彼女はやはり先ほどの少女二人と同じく美貌に恵まれていた。

「それはあなたも同じでしょう。二十七祖に直視の魔眼、私達も大概ですがあなたも引けを取らないほど滅茶苦茶な一生だ」

あきれ顔で青いドレスの少女が言う。表情には親愛のそれが見て取れる。長年の友人……そういう雰囲気は二人の、いや、三人の間に感じる事ができる。

「そ・れ・に、あなたの話はほとんどが惚気話になるじゃない。胸やけしてくるわよ」

雪の少女がため息をつく。それに反論するのは鮮血の瞳を持つ女性。

「むづなによ、それは二人にも言える事でしょう？ 事あることにシロウ、シロウ、って。そりゃあ私だって志貴の話ばかりだったかもしれないけど」

「……お互いさまという事でしょう。アルクエイドがその志貴という少年を愛していたのと同じくらい私とイリヤスフィールはシロウを愛していたという事です」

「アルトリア、そんなに愛愛言ってて恥ずかしくない？」

「恥ずべき事ではありませんよイリヤスフィール。黄金の朝焼けの

中、幾つもの世界の私はシロウにそう伝えてカムランの丘に帰っている。この私にもぼんやりと記憶があります。死してもなお忘れる事が無い大切な記憶です」

誇らしげに語る青いドレスの少女、アルトリア。

アルトリアの答えに感心した表情の鮮血の瞳の女性、アルクエイド。

そして砂糖の塊を口に放り込まれたような表情を作っている雪の少女、イリヤスフィール。

「リア母さんがそのシロウって人の事を大切に思っている事は分かったよ。イリヤ母さんもシロウって人の事好きだったんでしょ？

アル母さんは志貴って人の事」

「そうよ、ミーティ。母さんは志貴が好きだったの。うっん、多分ね、全ての世界のアルクエイドは遠野志貴に特別な感情を持っているわ。それが愛情であれ憎しみであれ。遠野志貴はアルクエイド・ブリュンスタットにとって特別な人なのよ」

三人を母と呼ぶアルクエイドにミーティと呼ばれた者。

「私もアルトリアと同じよ。良くも悪くも、衛宮士郎という男の子は特別。憎しみもあつたし、弟への愛情もあつた。男として愛した世界もあつたみたいね。ま、この世界の私は金ぴかに心臓抉られてるんだけどね……」

容姿は三人に劣らないほど整っている。

イリヤと同じ銀髪に顔立ちがアルトリアに瓜二つ。瞳の色はアルクエイドと同じで、目元も彼女にそっくりだった。

三人を母と言った事も頷ける。このミーティと呼ばれた五歳ほどの少年はそれほどまで三人の特徴を受け継いでいた。

「……会ってみたいな、シロウと志貴。やっぱり、文章だけじゃ分らない事ばかりだ」

ミーティは本の海を眺める。

本の一つ一つには様々な個性的な登場人物がいた。

母達の大切な人はもちろん、友人や敵、仲間や悪友、その登場人物たちに思いを馳せる。

「そうですね、こうして文章として観測するのが精いっぱいみたいですからね」

苦笑するのは明らかに人とは異なる姿をした少女。

金色のショートカットに薄緑色の瞳。アルトリア、アルクエイド、イリヤスフィールに劣らない可愛らしい少女だ。

しかし、長い耳に両手足は指が無く、まるで馬のように蹄鉄をはめていて尻尾まで生えている。

「うちのマスターも文章だけじゃ伝わらない事だらけですね。でも至る所にカレーという文字が書いてあるところは流石としか言いようがないです」

けらけらと声をあげて笑う半獣の少女。

「あっはっはっは！ まあシエルと言えばカレーだもんねえ。あ、懐かしい」

それに同調するようにアルクエイドも笑う。

「そのシエルって人にも会ってみたいな……。アル母さんの友達で、

「ななこのマスターだった人なんですよ？」

「友達って言うていいのかしらねえ？ 殺し合いする仲だったけど

……そうね、嫌いではなかったわね」

「アルクエイドさんが戯れなければ完全武装しても分が悪いんですけどね。でも、優秀だった事は確かです。結局私を精霊化できたのはマスターだけでしたし」

半獣の少女はななこと呼ばれた。

アルクエイドとは共通の知り合いがいるらしい。

「他にも会ってみたい人、見てみたい人が沢山いるよ」

「大丈夫ですよミーティ。時が来れば会える。シロウにも、シキにも」

「凜やリズ、セラ。大河やバーサーカー、カレン、バゼット、桜やライダーにも」

「シエルや妹、メイドにシオン、さっちゃん、ゼル爺にも」

「そのほかにも、私達が語って聞かせた物語の登場人物全てに会えます」

四人は微笑む。

ミーティの望みは近いうちに叶う。

それがミーティを造り上げた魔術師達の悲願でもある。

このクソツたれな世界とさよならして、自分達が生きた証を残す。それが魔術師達の願い。

そしてミーティに母と呼ばれる三人と、姉と慕うななこの願いは……。

「……そしてハッピーエンドを」

それがミューティの家族の願い。

深層世界（後書き）

テンプレにはのっとならずに書いていきます。

奇跡の産物（前書き）

主人公はチートのように強くはないです。

奇跡の産物

世界は既に滅んでいた。

人は既に一人を残し絶滅。

人だけではない。既に動植物のほとんどが死に絶え、マナも枯れ果て、異星の常識を逸した生命体の攻撃を受けている。

とうの昔に魔術師は滅んだ。それと敵対していた聖堂協会も滅んだ。

人を餌としていた死徒も滅びた。人が滅ぶと同時にアラヤの抑止も消えた。

瀕死だった星はガイアの怪物が息絶えると同時に完全に死んだ。

今や地球は鋼の大地。

死した星には地球にも想像できていなかった生態系が樹立し、星の亡骸の上で生活している。

その死した地球の地中深く、かつてアトラス院と呼ばれた建造物の中にそれは存在していた。

SF映画に出てきそうな生体ポット。自然界ではありえない蛍光グリーンの液体に満たされたポットの中には一人の少年と槍、そして二つの剣が浮かんでいた。

腰近くまである銀色の髪に背中と腕には独特なタトゥーが彫つてある。

既に廃墟と化しているこの研究所で唯一このポットだけが稼働している。何百年、何千年とこのポットだけが稼働していた。

このポットの中身こそ魔術師達がたどり着いた一つの境地。魔術師達の悪あがきの結晶。

人造生命体ホームクルス、その頂点に立つ至高の作品。幾つもの奇跡が重なって誕生した正しく奇跡の産物。

名をイミテーションと言う。滅びゆく魔術師が一致団結し協力するというありえない状況から作り出された、魔術師達の悪あがきの結晶。

マナの枯渇。地脈が次々と死んで、オドも段々と少なくなっていく。ゆっくりと衰退していく魔術師達。

科学の進歩と共に駆逐されていった裏の住人達。

人は過ぎた科学力でついに星を殺すまでに至る。

星が死ぬ前に魔術師は絶滅していたが、一つの作品を世に残していた。

何とか自分達が、魔術師がいたという証を残そうとあがいた。

根源を目指すという目的の元、全ての魔術師がライバル。そんな魔術師達が手を取り合ったのだ。そこまでの緊急事態だった。何しる時が進むにつれてマナもオドも枯渇していくのだから。

そうして一大プロジェクトが発足した。

目的は一つ、どれらいものを作り上げるとい何とも曖昧なものだったが……。

集まったメンバーはそうそうたる顔ぶれだった。

バルトロメロイ、アーチボルトを初めとするロード。遠坂、エーデルフェルトといったシュバインオーグの弟子の家系。場を提供したエルトナム。そして千年以上も領地に引きこもっていたアインツベルンまでもが協力を申し出た。

他も数百規模の魔術師達が一つの目的の為に手を取り合った。正しく異常事態だ。

そしてとりわけ大きく貢献したのは遠坂、エーデルフェルト、エルトナム、アインツベルンの四家。

代償を払うものの遠坂とエーデルフェルトは宝石剣の劣化版と呼ばれるものを作り上げていた。これで魔力不足は当面の間解決できた。

そしてエルトナムは何と真祖の姫の血液を保存していた。何代か前の当主が何故か姫君と親交があったらしい。

この事に魔術師たちは興奮を隠せずに沸き立った。

それならばと遠坂はある英霊の血と毛髪を持ちだした。遠坂でもっとも優秀だった当主が保存していたらしい。聖杯戦争のパートナーだった英雄の血液、本物の英雄の血液だ。これも魔術師達を興奮させるには十分だ。

そしてアインツベルンは過去最高の性能を誇った聖杯の器のクローンと、とある騎士のものとされる兜を提供した。兜からは血液が奇跡的に採取できた。

素晴らしい材料がそろっている。

ならば、この血液や毛髪を使いホムンクルスを造ろう、という結論に至った。

アインツベルンの全面指揮の元、仲たがいをする事もなく淡々と作業をこなす魔術師達。まだ繁栄していた魔術師達が見たら卒倒ものの光景だ。

かくしてこの一大プロジェクトは順調に進んでいった。

一代では終わらず、子の代、孫の代と衰退し力を失いながらも作業を一心不乱にこなしていった。

その実設計に十数年、製作に百数十年、成熟に百数年、覚醒にそれ以上の年月をかけるといふ規格外なものだが、彼らは作り上げた。製作者の全てが死に絶えた今でも目覚めの時を待ち続けている。

女であった素体の性別を男に変更した。これは単に子孫を残しやすくするためだ。

奇跡的に血の拒絶反応はなかった。強大すぎる血に秘められた力に耐えられるように調整を続け続け……安定した事に喚起した。色々手を加える。安定した魔力運営ができるように、運動機能、

生殖機能に異常をきたさないように、短命でないように。狂気に取りつかれたように完璧を目指した。

武器も最高のものを求めた。

ブラックバレルのレプリカ。そして誰かがどこからか調達してきた第七聖典。聖典制御の為の聖痕も刻み込んだ。適合も確認した。魔性の血を引きながら聖典を問題なく使いこなせるというところでもないものを作り上げた。

結果的に言うとプロジェクトは成功した。

この上ない成功だ。正に奇跡。彼らはやりとげた。

このホムンクルスが動く事を見る事は出来ないが、彼らはおおよそ満足だった。

同じ志の元集まった魔術師の子孫も全てが死に絶え、ついに魔術は絶滅した。

あとに残ったのは悪あがきの結果だけ。

意識の芽生え（前書き）

第七聖典はパイルバンカーから槍に改造されています。

意識の芽生え

いつかは分らないが、確かに意識が芽生えた。ちゃんとした自我を持つ、自分を自分と認識できる。名前はまだないが確かに幼い自我が誕生していた。

その幼い自我を持つ者は、真つ暗な空間に豪華で神々しい大きなステンドグラスがある……そんな場所に立っていた。

どこだか分らない。自分が何なのかも分らない。言いようもない不安に押しつぶされそうになっていたところに声かけられた。

「あ、ついに起きたの。ふふふ、一体どれだけの時間をここでこうして待っていたのかしら」

「ええ、随分と長く待ったものです」

「でもちゃんと起きてくれたからよかったわ。あなたが起きないと私達がここにいる意味が無いもの」

「はあゝでもやっぱり人の形ではないんですね」

そこには四人の女性がいた。

「私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。いわばあなたのオリジナル」

「私はアルトリア・ペンドラゴン。貴方と同じ血を持つものです」

「私はアルクエイド・ブリュンスタッド。貴方はそうね、最後の人の手で造られた最後の真祖。貴方とは同族よ」

「私はセブン。貴方とリンクしている第七聖典の精霊なんですよ」

丸いテーブルに座席は五つ。空席はおそらく今芽生えたこの意識の席。

四人はにこやかな表情でこちらに手を振る。

銀髪の少女、青いドレスの少女、朱色の瞳をした金髪の女性、半獣の少女。四人が四人とも美しかった。が、自己紹介をされてもその全ての顔に見覚えは無かった。

「さあ私達四人の最初の仕事です。貴方に名前を授けましょう」

「な……まえ？」

「そう、名前よ。悪魔は名前を与えられる事で自由になるとかそういう話をメレムから聞いたことがあるわ。あなたも名前を持って自分を認識したら現状よりましになると思うの」

「こんな殺風景なところじゃあ嫌でしょ？ 気が滅入るわ。名前を持って、本当の意味で自分を認識したのならここの風景も変わるはずよ。ここは貴方の深層世界なんだから」

殺風景と言ったイリヤスフィール。

真っ暗な空間にステンドグラス。テーブルが一つに椅子が五つ。確かに殺風景だ。

「実はですね、既に四人で考えているんですよ。気に入ってもらえるといいんですけど」

「貴方を造った魔術師たちは『イミテーション』と貴方と呼んでいたわ。でも『まがい物』なんてあんまりでしょ？ だから、少し崩してみたの」

「『ミーティ』。これがあなたの名前です」

「ミーティ。ある意味私達の子供とも呼べる小さな命の名前。……気に入ってくれたかしら？」

四人から名前が送られた。

そうするとカチリ、とパズルの最期の一つが埋まったような感覚が体を駆け巡った。

「ミーティ、僕はミーティ」

そう己の名を口にしたら景色が一変した。

暗闇が徐々に晴れ、床が、壁が、天井が現れる。

どこか薄暗い古びた西洋式の部屋だ。ステンドグラスと椅子とテーブルは相変わらずだが、一応部屋と呼べるものにはなった。

「ふむ、これがミーティの深層世界ですか」

「何よ、殺風景なのは変わらないのね」

辺りを眺めるアルトリアと不満なのか頬を膨らませるイリヤスフィール。

「あ、すごい。ここ間違いなく千年城だわ。これが深層世界って事は、ミーティはやっぱりブリュンスタッドで間違いないわ」

「じゃあミーティは本当に真祖の血を引いているんですね」

感心するアルクエイドと驚くセブン。

「あ、ほら見て下さい。さっきまで光の球だったミーティが……」

「人型を形成していく……。完全に魂が肉体とリンクしたみたいよ。」

「……あら、中々可愛いじゃない」

くすりと笑うイリヤスフィール。

ミーティが成った姿に他の三人もほうと息を吐く。

「顔立ちは私にそっくりですね」

と、アルトリアが。

「髪は私譲りね」

満足そうにイリヤスフィールが。

「眼は私似よ」

笑顔でアルクエイドが言う。

「すっごく可愛らしいです!」

セブンは尻尾を振ってキヤーキヤーと声を上げている。

「僕は誰……? 貴方達は僕の何?」

心からの疑問だ。

名は貰った。ミーティ、それが自分の名前だと認識できる。

しかし、分かったのはそれだけ。

イリヤスフィールと名乗った少女はここはミーティの深層世界だという。

「まずは座りましょう。ほら、私の隣が空いています」

セブンがポンポンと隣の椅子を叩く。とりあえずは席に着く事にした。

「さて、聞きたい事は山ほどあるでしょう。でも、意識がしっかりとした今なら色々な事が分かるでしょう?」

「世界から情報が送られてくるはずよ。ミーティ、あなたは世界に

属する精霊種、真祖である私の血も流れているのだから」

「ん……」

この世界は既に死んでいる。

しかし、遠坂とエーデルフェルトが穿った針の先にも満たない小さな孔から情報が流れ込んできている。

会わせ鏡のごとく無限に広がる並行世界に繋がる小さな小さな孔。そこからまだ生きている地球から知識が送られてくる。

それを水を吸うスポンジのごとく吸収していく。

様々なデータが蓄積されていく。世界の事、一般常識、裏社会の知識からおばあちゃんの豆知識まで余すことなく脳に刻み込んでいく。

そして自分がどういう存在なのか改めて認識した。

ホムンクルス。それも規格外の。

そして史上初の人の手によって造られた真祖ともいえる。

「大体の知識は受け取ったようですね。世界から送られる情報は膨大だがわりとすんなり受け入れられる。二度サーヴァントとして召喚されましたが苦痛は感じませんでした」

サーヴァント……アルトリアが言ったその意味が理解できる。

真祖……アルクエイドが言ったその言葉も理解できる。

「さて、十分な知識を得たところで改めて自己紹介といきましょう。私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。アインツベルンによって造られた聖杯の器、ホムンクルス。そのホムンクルスの意識体が私」

「私はアルトリア・ペンドラゴン。かつてのブリテンの王、アーサーが死後英霊となった存在。正確には、数多の世界の英霊アーサー

の意識の残りカスの集合体です」

「さつきも言っただけど私はアルクエイド・ブリュンスタッド。正確にはアルクエイド・ブリュンスタッドという存在の魂の欠片の集合体。アルトリアと同じ存在と思っていいわ」

「私は第七聖典の精霊セブン。私の場合は意識の集合体ではないです」

理解できる。知識として知っている。

アーサー。いつか蘇り国を救うとされているブリテンの偉大なる王。

聖剣エクスカリバーを持つ騎士王。

ブリュンスタッド。真祖の王族の称号。月の王の器。

分かる。言葉の意味が。

目の前にいるのがかの高名な騎士王たるアーサーと真祖の王族であることは理解できた。

しかし、彼女らは意識の集合体、魂の欠片の集合体だと言った。

……それはどういうことだろうか？

「分からないって顔してるわね。いいわ、お母さんが教えてあげる！」

イリヤスフィールがポンポンと自分の胸を叩く。

「……お母さん？」

「そうよ。貴方には私やアルトリアの血が実際に流れているわ。それに雛型はイリヤと同じだしね。私と、アルトリアとイリヤはお母さんのよ。少なくとも私達の意識がこの深層世界で覚醒してからずっと、貴方の事を自分の子供だと思ってきた。」

「残念ながらその件に関しては私は完全に部外者ですから。でもで

も！ 私はあるですよ、そう、お姉ちゃんです！」

自らを母と言ったイリヤスフィール、アルクエイド、アルトリア。
姉と言ったセブン。

正直なぜそうしてまでして身内を名乗るのかミーティには理解で
きなかった。

でも。

「……お母さん、お姉ちゃん」

悪い気はしなかった。

意識の芽生え（後書き）

イリヤ、セイバー、アルク、ななこの組み合わせは珍しいと思う。

起きる前 イリヤの目覚め

ふと目が覚めた。

意識の混濁は見られない。自分が何者であるか正しく認識でき
し、自分の最期もしつかりと記憶している。

「……そっか、私……死んじゃったんだ」

イリヤスフィールはため息をつく。

アインツベルンの悲願の達成、そして死という悲しき運命を持つ
ホムンクルスを自分で最後にするために戦った。

最高のパートナーを引き当てた。全サーヴァント中最高の能力を
持っているだろう大英雄ヘラクレス。心から信頼できる大好きなパ
ートナー。バーサーカーとして喚ばれた彼は他のサーヴァントを圧
倒する強さを持っていた。

聖杯戦争を勝つために調整された自分と、最高の能力をもつサー
ヴァント。

他のサーヴァントも決して弱くはなかった。

白兵戦でバーサーカーと渡り合った規格外なアサシン。

一度バーサーカーを殺してみせたアーチャー。

特に気になったのはこの二騎だが、それでもバーサーカーの有利
は揺らぎなかった。

しかし、バーサーカーは敗退する事になる。聖杯の器である自分
が知らない八騎目の黄金のサーヴァントによって屠られ……………。

「私は心臓をえぐり取られて死んだ」

覚えている。

バーサーカーを下したあのサーヴァントは歪んだ笑みを浮かべて小聖杯である心臓をこの体から抜き取った。

「でも……どうして意識があるのかしら……」

辺りを見渡す。

真っ暗な世界に豪華なステンドグラスが一つ。

大体見当はつく。何度か見た事のあるヴィジョン。おそらくここは……小聖杯の中。

「そついえば魂は心臓に宿るって聞いたことがあるわね」

自分の心臓の中、杯の内部に自分がいる。

英霊の魂を受け入れる為の聖杯。その中に聖杯の守り手……聖杯そのものとも言える自分がいるとは……。

「ふふ……幽霊って事かしらね？ 高貴な英霊の魂を満たすこの聖杯に私が混じるなんて。英霊と比べるとなんて矮小な魂なのかしら」

座り込み、ため息を漏らす。

「……負けちゃったか。勝ちたかった……アインツベルンの悲願をこの手に……私やお母様のような悲しいホムンクルスを私で終わらせるために」

自然と涙が溢れてきた。ぐしぐしと目元をこすり、きゅっと口を結ぶ。

「……まだ聖杯は満ちてはいない。ライダーとバーサーカーの魂は

回収できたはず」

ライダー、真名をメデューサ。サーヴァントの魂を回収したらその情報も得る事ができるため真名まで確認できていた。

「まだ魔力に還元されていないはずだから……もしかしたらお話とができるかな？」

今の自分は幽霊。いつ消えてなくなるかも分からない脆弱な存在。長くても……聖杯戦争の終了と共に意識も消えて無くなるだろう。回収している偉大な英雄の魂、ヘラクレスとメデューサ。最期の刻まで彼らと語らうくらいは許されるだろうと思いたい。

「メデューサはどんな人だろう？ 狂化してないヘラクレスはどんな風に喋るのかな？」

年甲斐もなく、いや、外見相応にはしゃいでみる。空元気は否めないが……そもそも既に死んでいるのだ、元気もなにもあったものではないが。

イリヤスフィールは聖杯の守り手、意思を持った聖杯そのものと言っている。

この暗い世界もいわばイリヤの内部だ、取り込まれた魂を探るなどたやすい。

たやすいはずなのだが……。

「……おかしいわ」

おかしいのだ。そう、おかしい。感じないのだ。大きな魂を感じない。どこにもいないのだ、この

小聖杯内部に英霊はいない。

「そんなはずはない……ヘラクレスは確認できないままだったけど、メデューサは確かに回収したのに」

空だ。少しも満たされていない。

ここにあるのは英霊一騎にも満たない小さな自分の魂のみ。

「……？」

否、かすかに感じた。

自分の魂よりもさらに小さい魂。

揺らいで、今にも消えてしまいそうな小さな小さな魂。

振り返るとそれはふわふわと浮かんでいた。

両手にすっぽりと収まるほどの白い光。おそらく視覚できる魂。

「……まさか、そういう事なの？」

大きな勘違いをしていたのかもしれない。ここは自分の心臓に秘められた聖杯の中ではない。

ここが自分の心臓内部ではないのならヘラクレスやメデューサが確認できない事も頷ける。

そうするとここは自分の後継機の内部だろう。

ユステイーツア系譜であるイリヤにはユステイーツアの記憶を受け継いでいる。同じユステイーツア系譜であった母、アイリスフィールの事も会話はできないがその存在を自分の中に感じる事ができた。

憶測でしかないが聖杯の守り手たるホムンクルスはどこか深い所でラインが繋がっているのだと思う。

おそらくあの金色のサーヴァントに殺された時にラインを通じて後継機の中に意識が流れ込んだのだ。

「……なんて小さな命……」

その命を愛おしく感じると同時に大きく顔を歪める。
後継機が存在。すなわちそれは自分と同じ、必ず死ぬ事を宿命されている悲しいホムンクルスだ。

「……お母様もこういう風に私の中にいたのかな？」

光に手を伸ばす。

確かに存在している小さな命。

自分の何に当たるのだろうか。妹か、それとも娘か？ どちらにしろ他人ではない。

そして光に手を触れた。

「っ……！？」

すると頭に衝撃が走った。思わず蹲る。

「な、なにコレ？ うあ……あ」

それは圧倒的な情報。

直接頭に叩きつけられる情報情報情報。

世界情勢、裏表の人間事情、歴史、一般常識、エトセトラエトセトラ……。

膨大な情報量に眩暈がしながらも現状が把握できた。

「……嘘みたいな話ね。奇跡も奇跡、本当に奇跡だわ」

口元を押さえながら送られてきた情報を整理していく。

まず今は西暦 年。冬木の第五次聖杯戦争から 年後。

魔術は衰退、発展しすぎた科学は順調に破滅へと向かっている。

この体はイリヤスフィール・フォンアインツベルンのクローン体を元に様々な改造が施されたホムンクルス。個体名をイミテーション。

混ぜられた血。オリジナルのアインツベルンと衛宮に加え、遠坂、エーデルフェルト、バルトロメロイ、アーチボルト、エルトナム、他多数の魔術師達の血。刻印の継承には失敗。

他、特筆すべきものが三点。

遠坂が保存していた英霊アルトリア・ペンドラゴン。即ち英雄アーサー王の血液。

アインツベルンが入手した兜から採取された反逆の騎士モードレッドの血液。

エルトナムが保存していた白き月姫の、真祖の血液。

これらの血液に奇跡的に適合。正真正銘アーサー王と真祖の姫の血を受け継いだ。

恩恵は以下。アーサーの有する魔力炉、真祖の世界からのバックアップ。魔眼とブリュンスタッドをも継承。

人の手によって朱い月の後継機候補が製造されたこととなる。

オリジナルとの差異。

性別、身体能力、寿命、魔術炉心、血、竜の因子。

魔術回路はオリジナルと同様、全身に刻まれた令呪を代用する。

又、小聖杯としての機能も残っている。

基本的な戦闘能力はアインツベルン製の戦闘用ホムンクルスと同等。しかし、魔力放出と世界からのバックアップで出力は跳ね上が

る。世界からのバックアップは固有結界内でのみ可能。

以下所持スキル。

魔力放出（C）

直感（C）

対魔力（C）

魔眼（B）

復元呪詛（B）

固有結界（EX）

アルトリアとモードレッドの血からスキルを継承しているがオリジナルに比べ大幅に劣化。

魅了の魔眼を継承。吸血鬼の復元呪詛を持つが死徒を作る能力は無い。

固有結界として千年城ブリュンスタッドを持つ。しかし、朱い月の意識体は存在しない。固有結界内でのみ真祖としての能力を使用可能。

以下武装。

第七聖典。

バレルレプリカ。

劣化宝石剣二本。

天のドレス。

第七聖典制御の刻印を体に刻み初期段階から永い時間調整したため、魔性の血を引きながらリスクなしに聖典の行使が可能。

アトラス院が保管していたバレルレプリカを武器として用意。

遠坂とエーデルフェルトの血により劣化版だが宝石剣の行使が可能。

元はアインツベルンの小聖杯のため天のドレスの着用、行使が可能。

能。

第二魔法と第三魔法両方の一端を行使できることとなる。

肝心な魔力不足は千年城展開時に受ける世界からのバックアップにより解決できる。

「……正に化け物ね。信じられないわ。魔術師が本気で協力し合えばこんな化け物を造れるのね」

イリヤの感想は当然のもの。

反則、チートともいえる規格外な存在だ。何度も繰り返すが存在そのものが奇跡なのだ。

「そしてこの体の意識が誕生したと同時に私の意識も覚醒した……」

このホムンクルスに魂が生じたと同時にイリヤは目覚めた。

「器は完璧、魂が宿るかが杞憂だったみたいだけど……見事に成功してるわね」

魂がある。つまり、生きている。

そう、ほんの少し前に生まれたのだ。

「魂が生じるのに一体どれだけの時間がかかったのかしら。そしていつ目覚めるのか……」

ふわふわと浮かぶ小さな命を優しくなでる。

じんわりと手の平が温かい。確かに生きていると感じられた。

「この知識は世界から送られたものね。この子と魂がリンクしたから私にも流れてきているんだわ」

しばらく光を撫でながら送られた知識を更に纏めていたらふと視界に何かが映った。

「……………？ 本？」

それは分厚いハードカバーの本。
いつからそこにあつたのかは分からない。首を傾げながらも光の元を離れ本に近づく。

「……………増えてる」

本の元までたどり着くともう一冊の本が忽然と姿を見せていた。
先ほどまでには確かに一冊だったが、確かに今は二冊ある。

「……………え？」

一冊手に取りパラパラと捲りぽかんと口をあける。

『衛宮士郎と遠坂凜と対峙。』

二者のサーヴァントであるセイバーとアーチャーをバーサーカーが追いつめる。

しかし、衛宮士郎がセイバーを庇いバーサーカーの攻撃を受け重傷。興が削がれ撤退』

「なに……………これ？」

『衛宮士郎を救出に来たセイバーと遠坂凜とアーチャー。』

衛宮士郎を奪還されるもバーサーカーで迎撃に出る。

足止めに残ったアーチャーが善戦。固有結界を展開しつつバーサーカーを九回殺して見せる。が、最終的にはバーサーカーはアーチャーを下す』

「……」

無言で文章を追っていく。

『バーサーカーの完全回復を待たずに森へ。

交戦。バーサーカーは遠坂に一度殺される。その後十二の試験に
ゴッドハンド
より復活。窮地に追い込むも 勝利すべき黄金の剣を投影した衛宮
カリバーン
士郎とセイバーによって完全にバーサーカーを殺されて敗北』

「……まさか」

手に取っていた本を放り投げて次の本を拾う。

隣にまた一冊増えていて一瞬手が止まるがかまわず次の本を拾い上げページを捲る。

『衛宮切嗣とアイリスフィール・フォン・アインツベルンの実の娘である^{と告げるとセイバーは顔を青ざめ完全に硬直。}

戦意喪失したセイバーと負傷したアーチャーはバーサーカーの敵ではなくマスター共々ここで殺害』

「……！ 次！」

『風呂場の窓から侵入してきたカレイドステッキと詐欺まがいの行

為で契約。魔法少女として爆誕』

「……三冊目は良く分からないけど……これは」

気がつくといくぶん本の数が増えている。それを片っ端から拾い上げ眼を通して行く。

『聖杯戦争終了から 年後、衛宮士郎、遠坂凜、間桐桜、藤村大河等の親しい人達に囲まれて息を引き取る』

『衛宮士郎、セイバー不在時に言峰綺礼の襲撃にあう。遠坂凜と共に戦ったが心臓を抉り取られて死亡』

『聖杯戦争二ヶ月前のバーサーカー召喚に体が耐えられず死亡』

『バーサーカーとアサシンが交戦中、背後に転移してきたキャスターに対応できずに殺される』

『アーチャーの放った宝具の爆発に巻き込まれて死亡』

「……まさか、並行世界を文章として観測しているの？」

イリヤの憶測は正しい。

イミテーションと名付けられたホームクルスが安置されている場所は、魔力を枯渇させないために劣化宝石剣によって針の先よりもさらに小さな孔を開いていた。

そこに真祖の側面を持つイミテーションが孔を通して並行世界から知識を得、情報が送られてくると同時に並行世界を観測していたのだ。正しく第二魔法の一端を行使している。

イリヤが取った本にはイリヤの知り得ない並行世界のイリヤの事が記されていた。捏造だと取って捨てる事も出来たが、本当に別世界の自分の出来事なのだと感じた。いや、理解した。

「まさか第二魔法をこの身で体験する事になるなんて……」

徐々に数を増やしつつある本を見てごくりと唾を飲み込み、イリヤは次の本を手にとった。

起きる前 イリヤの目覚め（後書き）

この世界のイリヤはUBWルートに似た世界で生涯を終えました。第五次聖杯戦争からかなりの年月が経っていますが、イリヤの感覚では死んでからそれほど時間は経ってない。むしろ死んですぐに目が覚めた、という状態です。

起きる前 セブン覚醒

第七聖典には精霊が宿っている。
あくまで第七聖典の守護精霊で、所持者の守護精霊ではないのが
みぞ。

聖典の元となった一角獣と生贄に捧げられた少女の魂が混じりあ
っているため、見た目は馬の特徴を持っている半獣。

歴代の主の中で彼女を形にできたのは一人のみ。聖典をパイルバ
ンカーに改造したりするとんでもない人だったが、彼女はマスター
を好いていた。

しかし、マスターも人間。寿命には勝てない。やがて死別は訪れ
彼女を顕現できる者はそれ以降現れなかった。

重量があるパイルバンカーから割と使用しやすい槍に改造され、
多くの担い手が聖典を持ち魔を屠ってきた。

しかし、彼女の意識は眠ったまま。埋葬機関第七位、通称弓。彼
女と死別してから彼女はずっと眠ったままだった。

だが、ついには目覚めた。

「……ここはどこでしょうか？」

久方ぶりに眼が覚めたと思っただけで知らない場所だ。

「しっかりと具現化されていますし」

ふさふさと揺れる尻尾。無骨な馬蹄。ぺったんこな胸に青い服。
しっかりと形作っている。

「まさかまさかの私の具現化に成功ですか。今度のマスターはあのカレーと同じくらい優秀なんですかね？」

かつての最愛のマスター。

色々と不満はあったが、良い人だった。

「さて、本当にここはどこでしょう？ 私を形にした事は認めますけどほっぽりだすとは頂けませんね」

しばらく辺りをきよろきよろと見渡しながら歩く。

「ん？ だれかいますね」

やっと人を見つけた。

見慣れない少女だ。綺麗な銀髪でとても可愛い。地べたに座って本を眺めているようだ。

「……驚いた。ここに私以外の魂が紛れ込むなんて」

先に言葉を発したのは銀髪の少女。即ちイリヤスフィール。

「私が見えるんですか！？」

形になったとしても彼女は精霊、霊体だ。

霊視能力を持っている人間、もしくは精霊などの霊的存在ならば見る事は可能だろう。しかし、普通の人間は霊を見る事はできない。彼女が驚くのは当然ともいえた。

「わぁ！ 珍しいですね。霊視能力があるんですか。私、第七聖典

の守護精霊で名をセブンと申します」

えへへと人懐こい笑顔を浮かべてイリヤに擦り寄る。人と話せる機会なんて滅多にないので嬉しいのだ。

「第七聖典の守護精霊？　なんでそんなものが……。なるほど、聖典とパスが繋がっているからラインを通して紛れ込んだのね。もともと七騎の英霊の魂を収納する聖杯だから複数の魂を宿しても問題ないわけか。

そもそも私がここに居るのだから既に重複しているわけだし」

考え込むイリヤだがセブンは首をかしげるばかり。

「あのー私、全然現状が分からないんですけど」

「ちよつと待って今いいところなの。魔法少女やつてる私が別の世界の妙にメカメカしい魔法少女と出会ったとことで……」

視線を本から逸らさずに答えるイリヤの隣に腰を下ろす。

「セブンと言ったわね？　とりあえず後ろに浮かんでいる光に触れてみなさい、状況が理解できるはずよ」

「あ、これですか？」

この体の本来の魂である小さな光。セブンはそんな事は知らないが、おそろおそろ触れてみた。

「……あ」

そして完全に魂と魂にラインが繋がる。波のように押し寄せてくる情報を脳で受け取り、思わず硬直してしまう。

そんな様子を見て本を閉じるイリヤ。

既にイリヤは数冊の本を読破していた。

記されていたのはイリヤスフィール・フォン・アインツベルンの様々な可能性。

聖杯戦争と関わったらほとんどの場合が戦争中か数年後には命を落としてしまう。しかし、ごく稀に延命し人並みの寿命をまっとうする可能性もあった。

それ以外も数え切れないほどの可能性、到底観測が追いつかないほどの様々な世界がある。

蒼崎制の人形に魂を移し替えたり、体をいじって延命する世界もあった。

義弟と結ばれる世界もあった。それ以外の男性と結ばれる世界もあった。魔術とは無縁の一般家庭に生まれる事もあった。聖杯の器として製造されても成人まで成長できる世界もある。

双子として誕生した世界。男として誕生した世界。アインツベルンに反旗を翻した世界。盲目だった世界。同性愛者だった世界。藤村組に引き取られた世界。本当に様々だ。

「しかし、私が同性愛とはね……」

どうもいまいちピンとこない。

愛だの恋だの知る前に死んでしまった。

(……)

ふと、送られてきた情報を処理しているであろう少女を見る。

(セブンと言ったかしら？ 確かに可愛い容姿だけど……うわ、どうしよう。ありあもしれない)

自分の中に芽生えた感情に頭を抱えているとセブンが現実に戻ってきたようでイリヤに話しかける。

「これはまた何とも筆舌に尽くしがたいほどの状況ですね。魔術師が手と手を取り合ってたらず教会も死徒も一掃できたんじゃないですか？」

「それはどうかしらね？ この子が生まれたのは本当に奇跡よ」

状況を理解したセブンがイリヤの隣に座る。

「それじゃあ自己紹介ね。私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。この体の元になったホムンクルスのオリジナルよ」

「改めまして、私はセブン。第七聖典の守護精霊です」

とりあえず二人は握手してみる。

「しかし真祖と英霊の血を正しく引くホムンクルスとは……いたっ」

話しているとどこからともなく出現した本が綺麗にセブンの頭にぶち当たる。

「いたたたた……本？」

涙目で頭をさするセブン。イリヤは手慣れた様子で本を拾い上げページをめくる。

「……私のじゃないわね。リンクした相手のものも観測できるのかしら？ 第二魔法は専門外だから分からないわね。凜がいればまた違ったのでしょーけど」

「?? 状況が読めませんが?」

「じきに分かるわ。ほら、あなたの本よ」

手渡された本を不思議に思いながらもページをめくる。

しかし、一行一行読むごとに書かれた内容に引き込まれる。息が詰まる。鼓動が早まる。

「こ……これは……」

それは 可能性。

本人さえ忘れていた名前がそこに記されていた。

セブンは本を勢いよく閉じ深呼吸して乱れに乱れた心を落ち着かせる。

「この本は一体何なんですか!? これは……」

「見ての通りよ。このホムンクルスには第二魔法の一部を体現している規格外よ。無意識のうちに文章として観測しているみたいね。ここにある魂、私とあなたを。その本に書かれている事は紛れもない事実なのでしょよね」

「そんな……」

セブンが呆けている状態でもどんどん本は増えていく。

イリヤは次の本を取り読む。セブンもそれに倣い本を手取る。

そしてまた同じように打ちひしがれる。

分かる、理解できてしまう。この本の内容、登場人物、そして主人公。

……自分だ。紛れもなく自分。記憶には無い。しかし、自分だという事は感じられる。

そこからは夢中になって読み続けた。
イリヤと二人して無言で本を取り読む。これを何度も何度も繰り返す。

ユニコーンに生贄として捧げられた。生贄には捧げられなかった。病気で死んだ。盗賊に襲われて死んだ。好きな人と結ばれた。好きな人と結ばれなかった。子供と孫に囲まれて穏やかに死んだ。人買いに売られた。聖典ごと死徒に滅ぼされた。真祖の姫にマスターもろとも殺された。猫の使い魔と友達になった。等々様々な内容が書かれてある。

「理解できたかしら？」

「……嫌というほどに」

記されているのは平行世界の自分。

つながりが感じられる。主は間違いなくこの未だ目覚めないホームクルス。

異常さは歴代の主達の中でもダントツだろう。

少女二人は一心不乱に本を読み続ける。

未だ本の数は増え続け止まる様子は無い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2583s/>

まがいものの朱い月

2011年7月29日17時58分発行